第11回

書かれた「この地」を読む

みのかもブックマーク

▲現在の木曽川の風景

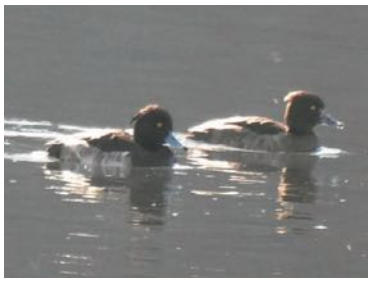
立松和平のエッセイを読む

国内外の各地を旅して、そこで出会う人々や自然をテーマに執筆し、行動派の作家と呼ばれた立松和平も、美濃加茂を訪れています。特に山や川を旅することが好きだった立松は、各地の川に息づく水と人の営みについて多くの文章を遺(のこ)しました。

『立松和平 日本を歩く』全7巻の内、第3巻『中部日本を歩く(勉誠出版：2006年)』には「**美濃太田でぽっかりと時間ができた。何をしようかとあたりを見渡すと、観光パンフレットがあった。**」という文から始まる「日本ライン」というエッセイが収録されています。

パンフレットに記載されていた木曽川のライン下りの案内を見た立松は「**どうせ犬山まで移動しなければならないので、船でいくのも風流かと思った**」と、今渡から乗船して川下りを体験します。いかだ流しやダム建設などの歴史に触れつつ、「**岸辺には鵜(う)やかもやおしどりが多かった。…鳥が多いということは、魚が多いということでもある。命の濃い、いい川なのだ。**」と書きました。

木曽川の風景に見出される命の循環。自然環境の保護問題に取り組んだ立松の言葉は、この地で生きていく私たちへのメッセージのようにも受け取れるのです。



▲木曽川に生息するカモ

立松(たてまつ) 和平(わへい)
(1947-2010)

栃木県に生まれる。早稲田大学政経学部在学中から小説家を志し、在学中に早稲田文学新人賞を受賞。栃木県宇都宮市役所勤務の後、1979年頃から執筆に専念。野間文芸新人賞、毎日出版文化賞などを受賞。

問みのかも文化の森
☎28-1110